

グローバル通信

Ryukoku University

GLOCAL TSUSHIN

2021.12 vol.57

若い力の活躍に期待を寄せて	1
健幸・観幸のまちづくりへ!	1
修士論文中間報告会・構想報告会の感想	2
国内フィールド調査報告	3
政策学研究科の授業紹介	3
第1回地域リーダーシップ研究講演会感想	4
地域公共政策士を取得した方の感想	4
協定先懇談会報告	4
事務局インフォメーション	4

大学院の第2学期が始まってから3か月経ち、キャンパスの景色も秋、そして冬の景色へと変わってきましたが、皆さまいかがおすごしでしょうか。

さて、今回のグローバル通信57号では、夏に開かれた修士論文中間報告会の様子をはじめ、国内フィールド調査の報告、第1学期の授業紹介、地域リーダーシップ研究の講演会の様子などを掲載しています。

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染が落ち着いている状況ですが、今年も気づけば、あと少しです。これから寒くなりますが、皆様どうぞお体にお気をつけてお過ごしください。



若い力の活躍に期待を寄せて

大垣 純一

(一般財団法人大阪市コミュニティ協会)

「住みよいまち」「思いやりのあるまち」「賑わいのあるまち」にしたい。人々の顔が見える「安心・安全なまち」でありたい。これらを実現するためには、生活空間を共にする人々とのつながりが欠かせません。

私たちは、若い世代が、自ら住む“まち”に魅力を感じ、地域に関心を寄せることが、ひいては地域コミュニティの活性化につながり、地域活動を推進する多くの団体とともに「まちづくり」に取り組むことが大切であると考えています。

大阪市コミュニティ協会は昭和50年代から各区で設立されてきた財団が平成22年に合併し、その後、一般財団法人になりました。この間、①地域コミュニティの調査・研究②区民のつどい等各種行事の開催③伝統文化継承やわがまち意識の高揚をめざす事業④コミュニティづくりに関する普及啓発事業⑤次世代の担い手育成事業⑥地域コミュニティの課題調査・研究等を取り組み、市民が自発的に参画できる「市民協働」の視点から、「やりがい」が感じられる地域コミュニティ事業を通じて、まちづくりにともに尽力してまいりました。

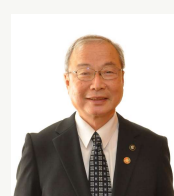
現在、昨年から続くコロナ禍の影響で、地域のコミュニティ活動のほとんどが中止を余儀なくされています。しかし、一方で工夫を凝らした新たな活動を続けている地域も多くあります。ITシステムを駆使した「オンライン区民祭り」をはじめ、コミュニティ活動を止めてはならない、と新たな活動を続ける動きも出てきております。ITに明るい若い力が加わって実現していることは、コミュニティ活動の将来への明るい「兆し」として、楽しみにしているところです。

龍谷大学「地域公共人材総合研究プログラム」には、当協会の職員も参加させていただいており、感謝しています。刻々と変化する社会にあって、地域課題の多様化も進み、より幅の広い視点でのアプローチが欠かせないと思います。ここで学びの場を得た若い力が、多方面で活躍されることを願って止みません。

健幸・観幸のまちづくりへ!

堀口 文昭

(八幡市長)



八幡市は、京都府の南西部、木津川・宇治川・桂川の三川が合流し、淀川となる地点に位置し、面積は24.35平方キロメートルで京都市・久御山町・京田辺市の区域内に飛地を有する人口約7万人の市です。

京都市、大阪市という二大都市の中間という交通至便な立地条件から、ベッドタウンとしてのまちづくりを進めてきましたが、近年の人口減少や高齢化に伴い、市内に仕事の間や暮らしを楽しめる場もある、より多機能能力を有したまちへの転換、すなわち「量から質への転換」を進めております。

「量から質への転換」は、第5次総合計画の将来都市像である「スマートウェルネスシティ、スマートウェルカミングシティ」の実現にもダイレクトに繋がるものです。

<スマートウェルネスシティ>は、「人に対する健康づくり(=医療費や介護費の増大を抑制)」と、「まちの健康づくり(=高齢者も自然にまちを歩きたくなるような都市的環境整備)」を同時に進める「人とまちの双方の健康づくり」が根幹であり、平成28年に国宝に指定された石清水八幡宮をはじめとする文化資源や周辺の自然景観、さらには三川が合流した淀川を中心に広がる豊かな自然景観を活かしたまちづくりを進めることは、「観幸のまちづくり(=観光に訪れた人々も幸せを感じられるようなまちづくり<スマートウェルカミングシティ>)」にも繋ぐことができると考えております。

このような中、平成30年10月から貴学との地域人材育成に係る相互協力に関する協定を締結させていただいております。「これから」の市職員には、企画力、当事者意識、積極性が必要となります。この協定により、貴学との相互連携をすすめて、地域社会に貢献できる人材育成に取り組んでまいります。新型コロナウイルス感染症の拡大により、人材育成や教育現場においては、新たな体制へのシフトが求められていると強く感じております。新型コロナウイルス感染症が一刻も早く収束に向かうことを願うと共に、貴学のさらなる発展をお祈り申し上げます。

修士論文中間報告会・構想報告会の感想

龍谷大学政策学研究科・法学研究科・経営学研究科では毎年7月に修士論文の途中経過を報告する「修士論文中間報告会」「構想報告会」を行います。

政策学研究科から2名、経営学研究科から1名の方に、報告会の感想を頂きました。

砂野 信（政策学研究科修士課程1年）

現在、「そば打ちという趣味活動がもたらす”文化的紐帯”が地域づくりにどのような有用性を持つか…」というような内容で論文作成に励んでおります。

先日の中間報告では、先生方から「分析対象のポイントを何処だと見定めているか?」、「研究者として対象をどう捉えどう評価しているのか?」など、自分でも注意はしていたものの表記・表現として伝わっていない部分をご指摘頂きました。指導教員の先生にも、質的研究の枠組みをご指導頂き、印象論ではなく事実をしっかりと客観的に捉え、なぜその現象が生じたのかを経験的・実証的に分析するための論文作法を、親切丁寧に何度もご注意頂きました。

あくまで、今向き合っているのは学術論文であり、「個人的な感想文」や「単なる報告文書」に陥らないよう留意して取り組みたく思っております。これから中間発表に向け、より先行研究を精読し分析考察を重ね、じっくりと纏め上げてゆく所存です。

研究がこんなに楽しいのだったらもっと早く挑戦しておけばよかったと思っております。このような機会を与えてくださった関係各所の皆様に心より感謝の意をお伝えしたいと思います。



中村 雅彦（政策学研究科修士課程1年）

「あなたのしたいことは何ですか。」4月の入学後、最初に論文指導の先生から突き付けられたのは、そんな本質的な言葉でした。ストレートに突き付けられた問いを前に、私はただ沈黙するしかなく、「先行研究を読みなさい。」と、何度も指導される日々が続きました。臍げに抱くイメージを少しずつ形にできるよう、曖昧な一言一句から論文を書き上げるのは、本当に難題です。

私は期限を切られないとなかなか前に進めないタイプなので、中間報告会での発表という進め方は、論文に向き合うという意味ではとても効果的でした。とは言え、なんとか中間報告会を終えられたのは、締め切り直前の相当タイトな時間で、指導の先生からの的確なアドバイスをいただけたからに他なりません。

また、発表会の場で他の先生方からいただいた指摘でも、自分では気づかない所を鋭く的確に突かれました。自分の論文が多くの人に読まれ、指摘をもらう。それが研究をさらに洗練させるための気づきに繋がるととても重要なことだと改めて感じました。

今も論文指導や授業の中で、自分の論文をブラッシュアップさせてもらえる先生方や大学院生の仲間の存在に大変感謝しています。

これから修士論文の佳境に入ります。たいへん遅い歩みではあるものの、たくさんのアドバイスを受け、少しずつ着実に、自分だけが書ける論文に仕上げていきたいと思っております。



福原 次信（経営学研究科修士課程2年）

私の課題研究のテーマは「経営を維持し発展させる視点からのテレワーク研究-小規模デザイン事務所の事例から-」です。7月7日このテーマで構想の報告を行いました。

課題研究に、このテーマを取り上げた理由は、私が経営している会社そのものが新型コロナウイルス感染拡大防止の立場から昨年の3月から今日まで「テレワーク」の仕組みで、企業活動を続けているからです。

テレワークは、コロナ禍以前から「働き方」の視点で研究されてきたテーマでもありました。パンデミックとなった昨年、一気にテレワークが広がるとアフターコロナの働き方として大変注目されています。

しかし、このような「働き方」とは別に、経営者には、経営を維持し発展させる責務という課題があります。その課題は、「利益を上げ蓄積する」「強みを構築して選ばれる」「社員の能力を高める(人を生かす)」ことです。

このような経営課題が、今まで(職場勤務時)と同じようにテレワークにおいても遂行することができるのか?経営組織のマネジメントや経営者の役割について、経験を通しての研究です。

参加された先生方より、いくつか質問がありました。総じて「経営課題」の部分についての論点です。筆者自身が抱えていた曖昧さを補ってくれるヒントを頂きました。助かっています。また、私の報告の前に、留学生が構想報告を行っています。デジタルスキルがハイレベルであることに感心しました。その留学生たちとも入学時に一度あっただけで今回が2回目、それもオンラインでした。リアルでの交流に期待しています。

国内 フィールド 調査報告

9月上旬、国内フィールド調査で和歌山県田辺市を訪れました。

修士論文では、南海トラフ巨大地震で津波被害が想定される地域の事前復興について、産業面に着目し研究をすすめています。

今回は、1946年に発生した昭和南海地震や地域産業に関わる資料など、現地では収集できない資料を調査してきました。

また、当時の浸水被害を伝えている津波伝承碑、昭和南海地震の被害から1990年代に高台移転された住宅跡地にできた親水公園に建てられた伝承碑などを見てきました。

今回の国内フィールド調査で得た知見を、来年度の修士論文執筆に活かすため、邁進して参ります。

杉山 和則（政策学研究科修士課程1年）



政策学研究科 の授業紹介

地域公共人材総合研究特別演習 前期の講義を終えて

この科目は、地域公共人材総合研究プログラムの必修科目です。大学院1年生は全員履修します。授業内では、院生が事例の紹介や修士論文の執筆状況を発表しました。

地方自治体やNPO等の諸団体所属の社会人院生、学部卒の院生、海外留学生という年齢・業種・国籍が異なる多様な院生が、それぞれの経験やスキルを駆使して、社会課題の解決策について討論しました。

前期は、子育て、仕事、学業の両立で大変忙しい学校生活となりましたが、院生同士が互いに励まし合い、楽しさや苦しさを共にしながら、学業に励みました。卒業後は地域公共人材政策士のネットワークを構築し、チームとなって社会課題の解決に貢献していきたいです。

坂本 未希（政策学研究科修士課程1年）

地域経済学研究を終えて

地域経済学研究は大学院生として一番初めの授業でした。若干、緊張もありましたが受講者数4人と少人数であったこともあり、気兼ねなく議論ができる環境であったと思います。輪読は「輝く農山村」「地域衰退」「ポスト資本主義社会」「公共政策のすすめ」「地域経済学入門」の順で進んでいきました。

どれも自分の興味に当てはめやすくそれぞれ違った視点から読み進め、議論をすることは楽しかったです。やはり第一印象が響くこともあり「輝く農山村」は印象に残っています。山岳地域の厳しい条件下でも農業に対していかに価値づけていけるかやその方法も多様で、あまり農村政策に触れてこなかったこともあり新鮮でした。オーストリアの農山村事情は日本のそれと違う点が多いですがいつか自分の目で見て体験できる日が来るのを待っています。

毛藤 洸大（政策学研究科修士課程1年）

2つのワークショップ実践演習を終えて

・コミュニケーション・ワークショップ実践演習

本講義は、地域公共人材に求められる「つなぎ・ひきだす」コミュニケーション能力育成、ファシリテーション能力の基礎知識と基礎技術の修得を目標としており、ファシリテーターについての講義後にワークショップを行い、様々なテーマ設定で話し合いの実践を行いました。また、今回はオンラインと対面の両方でワークショップを体験し、それぞれのメリット・デメリットを知ることができました。今、セクターを超えた対話や協働の場が増えており、今後も実践を重ねて自身の力を高めていきたいです。



・協働ワークショップ実践演習

本講義は、協働型社会におけるワークショップ運営やコミュニケーション能力の獲得、セクターを超えたマルチパートナーシップの重要性や可能性の理解を深めることを目標としており、今回は『フードロス』の事例を基に小グループに分かれてワークショップを行い、課題解決に向けた提案をプレゼンテーションしました。様々な社会課題の解決に向けて、ワークショップの開催やマルチパートナーシップとの協働がより一層求められており、今回の学びを実務で活かしていきたいと思っています。

渋谷 育美（政策学研究科修士課程1年）

第1回地域リーダーシップ研究講演会感想

講師：東近江市小椋正清市長

テーマ：うるおいにぎわいのまち東近江市～鈴鹿から琵琶湖の恵みを生かし人が輝くまちづくり～

森井 直 （政策学研究科修士課程1年）

講演会、その後の質疑応答で小椋市長が繰り返しおっしゃっていたのは、リーダーとして、①歴史観をしっかり持つこと、②地域の独自文化・地域性を理解し大切にすること、③その上で自身の考え（根拠を担保した上で）をしっかり待つこと、④考えを自分の言葉で伝える、語りかけること、⑤最終的に自分が決断する、⑥決断したことに対して責任をもつ、責任をとること、⑦人材育成においても、きちんと議論すること、勉強の重要性（リーダー自身も常に勉強する）を伝えること、能力のある者にはしんどい仕事、困難な仕事を経験させること、でした。

質疑応答では、随行していた東近江市の職員の方にも話を伺う機会がありました。随行職員の方は、こうした市長のリーダーシップを評価しており、こうした市長の下で仕事に対するモチベーションも向上していると仰っていたのが印象的でした。

行政職員のモチベーションを保つ、向上させる一つの要素として、リーダーの姿勢、リーダーシップが重要だと改めて感じました。私自身、消防職員として仕事をする上での重要なリーダーの要素を学びとれた気がしています。



地域公共政策士を取得した方の感想

特定非営利活動法人ひらかた市民活動支援センター

中野 ともみ さん （2019年度政策学研究科修了生）

龍谷大学大学院政策学研究科で得た学びは、私の人生を大きく拡張してくれました。

なかでも、地域公共政策士取得過程で得た、自身を「多様な人々をつなぐ結節点と位置づける視点」と「寄り添うマインド」は、NPO職員としての日々の業務遂行の土台となっています。

また、キャップストーンでSDGsに取り組んだことが契機となり、現在「SDGsカードゲームファシリテーター」として、微力ながらもSDGsの本質の普及につとめる機会をいただいています。

地域公共政策士とSDGs、この二つは私にとって「課題をフォーカスするメガネ」となっています。今後も無限にある社会課題への視座を高め、「理論と実践の架け橋」となれるよう、学びを続けてまいります。



協定先懇談会報告

2021年10月6日（水）、地域公共人材総合研究プログラム地域連携協定先懇談会を開催しました。この懇談会は毎年7月に本学深草キャンパスにて開催していますが、コロナ禍の影響により、2020年度よりzoomを利用し、オンラインにて開催しています。今回は協定締結先団体より47名の方々にご出席いただきました。

懇談会では、本学大学院の教育理念・目的、地域公共人材総合研究プログラムの概要や、プログラムに参加している2研究科（政策学研究科、法学研究科）の特長などについて説明いたしました。

後半の意見交換では、実際に本プログラムにて修士課程を修了された方の経験談や、研究指導体制に関することなど様々な意見をいただきました。zoomによるオンライン会議ということで、遠方からなかなかご出席いただくことが難しい団体さまからのご出席も賜り、大変有意義な会となりました。

事務局インフォメーション

政策学研究科 修士論文・課題研究報告会
2022年3月12日（土）10:00～（予定）

※7月10日（土）に開催した中間報告会には、多数の修了生の方々にご参加いただきました。ありがとうございました。3月については、現状学内での開催を予定しております。ご都合がよろしければ、是非ご参加くださいませ。

地域公共人材総合研究プログラム ニュースレター 「グローバル通信」 通巻57号 2021年12月

発行 / 龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム H P / http://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/

連絡先/ 政策学部教務課

編集 / 木下太朗、杉山和則、田中智朗

TEL:075-645-2285 FAX:075-645-2101

編集補助 / 今井航平、長友吟示、田中博之

監修 / グローカル通信編集委員会